



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ウズベク映画上映会 : 1920年代無声映画の再発見」に寄せて
Author(s)	帯谷, 知可; OBIYA, Chika
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 67-74
Issue Date	2020-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.16.67
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88506
Type	journal article
File Information	JB016_017obiya.pdf



「ウズベク映画上映会——1920年代無声映画の再発見」に寄せて

帯谷 知可

2019年12月10日、京都大学において「ウズベク映画上映会——1920年代無声映画の再発見」を催す機会を得た。きわめて控えめな催しではあったが、ここで得られた情報や知見は中央アジアの近現代史や文化史の研究にとって興味深い内容を含み、いくつかの研究領域において今後の研究が進展する契機を含むのではないかと感じられたことから、ここに紹介させていただく次第である。

1. 上映会の概要

この上映会は、ウズベキスタンの映画史・映画研究の第一人者ニゴラ・カリモヴァ⁽¹⁾氏 (Nigora Karimova / Нигора Каримова)⁽²⁾、およびウズベキスタンの無声映画再生プロジェクト(後述)を展開する映画監督エルジョン・アッバソフ⁽³⁾氏 (Eljon Abbasov / Эльджон Аббасов)の来日の機会を利用して企画したものである。概要は以下の通りであった。

上映会ポスター

- (1) 1964年生まれ。ウズベキスタン科学アカデミー・ハムザ記念芸術学研究所映画テレビ研究部門長。博士。主著として Karimova [2016] がある。国際映画批評家連盟 (FIPRESCI: Fédération Internationale de la Presse Cinématographique) 会員。
- (2) 以下、必要な場合にはウズベク語/ロシア語の順に原綴を付す。
- (3) 1966年生まれ。英語表記では Eljohn Abbasov とも。ロシア国立映画大学 (ВГИК: Всероссийский государственный институт кинематографии имени С. А. Герасимова、現在は институт ではなく университет) 卒。フリーランスの映画監督として、民族誌・エコロジー・歴史などに関するドキュメンタリー映画制作を中心に活動する。ちなみに「タシュケントはパンの町」(1968)などの作品で有名な故シュフラト・アッバソフ監督 (Shuhrat S. Abbasov / Шуҳрат С. Аббасов、1931-2018) のご子息である。

日時：2019年12月10日(火)15:00-17:30

会場：京都大学稲盛財団記念館中会議室

プログラム：ミニ・レクチャー (N. カリモヴァ、E. アッバソフ)

映画上映「毒された者」⁽⁴⁾(Прокажённая) (1928年)

「シネマ・レクチャー (Киноекзорий)」(2018年)

冒頭、カリモヴァ、アッバソフ両氏に各10分程度のミニ・レクチャー (ロシア語) をしていただいた。カリモヴァ氏からはウズベキスタンにおける映画の発展史、とりわけ1920～30年代の無声映画、当時の上映形態や観客について、ならびに今回の上映作品についての解説が行われた。アッバソフ氏は、スターリン時代にウズベキスタンの映画人の大多数が粛清の犠牲となったことから一群の無声映画は長らく忘れ去られていたことに言及し、それらに再び光を当てるプロジェクトの経緯を紹介した。

催しの告知段階では「死のミナレット (Минарет смерти)」、「毒された者」、「シネマ・レクチャー」の3作品の上映を予定していたが、時間的な制約から「死のミナレット」は残念ながら上映を見送ることとなった。なお、「毒された者」については、上映用に当該プロジェクトによって英語字幕と音楽が新たに付されていた。上映終了後には再び両氏から簡単なコメントがあり、さらに質疑応答を行った。

2. 上映作品について

「毒された者」は、1928年ウズベクゴスキノ (O‘zbek davlat kinosi / Узбекгоскино)⁽⁵⁾制作のモノクロ無声劇映画である。ロシア帝政期の中央アジアを舞台に、底なしの悲運に見舞われる女性の姿を描く。ある通訳官の無邪気な娘ティツリャオイは地元名士の息子に嫁ぐが、結婚後、夫は彼女を顧みず暴力さえふるうようになる。孤独の中救いを求めるティツリャオイに、ロシア人郡知事の息子が甘い言葉で近づき、二人は不倫の関係になってしまう。憤慨した夫に離婚されたティツリャオイの運命の歯車はすっかり狂ってしまい、もはや誰にも頼ることができず、どこにも居場所がない。

実は作品の原題は、直訳するなら「女性ハンセン病患者」である。なぜこのタイトルがついたのかは映画の最後にわかる。あてもない彷徨の果てに、ティツリャオイはそれと知らずにハンセン病患者の隔離集落に迷い込む。その人々の姿に驚き慌て、集落から走り出たとこ

(4) 本上映会のために筆者が付した仮の邦題。

(5) ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国の映画会社 Трест «Узбекгоскино»。1925年タシュケントに、シャルク・ユルドゥズ(東方の星)映画スタジオとともに発足。1936年「ウズベクフィルム」に改組。

ろで、街道を行く人々から彼女も罹患者だと誤解され、病気を恐れパニックになった彼らの暴力にさらされてしまうのである。こうしてティツリャオイは非業の死を遂げる。

主演を演じたラヒリ・メッセレル(Рахиль М. Мессерер、芸名ラ・メッセレル Ра Мессерер、1902–1993)はロシアの女優で、前年に制作された「二番目の妻 (Вторая жена)」でも主演を務めた。彼女はまた、のちのソヴィエト＝ロシア・バレエの至宝マイヤ・プリセツカヤの母でもある⁽⁶⁾。

原作はフランスの作家フェルディナン・デュシェン(Ferdinand Duchêne、1868–1956)の小説⁽⁷⁾で、カリモヴァ氏によれば、当時のソ連でこの作家は人気があった⁽⁸⁾。原作で描かれたフランスとアルジェリアの関係が映画ではロシアとウズベキスタンの関係に置き換えられた。撮影はフェルガナ地方で行われたことがわかっている。

一方、「シネマ・レクチャー」(2018年)は、ウズベキスタン無声映画の誕生と発展に焦点を当てた、アッバソフ氏のドキュメンタリー作品である。当該プロジェクトにより発掘されたフィルムからの多数のフラグメントと、それらの制作に関わった、あるいはそれに関する記憶を有する映画人や、現代の専門家たちのインタビューを含んでいる。ウズベキスタン国内外においてすでに上映・紹介された実績があるとのことだが、URL: [facebook.com/abbasov.eljohn/videos/кинолекторий-фрагмент-фильма/1973805629412012/](https://www.facebook.com/abbasov.eljohn/videos/кинолекторий-фрагмент-фильма/1973805629412012/) で、あるいは Facebook 上で「Кинолекторий. Lectures about Cinema.」と入力して検索すると、この作品の予告編を観ることができる。

3. 1920年代ウズベク無声映画再生プロジェクト

アッバソフ氏はその家族環境や映画人としてキャリアを積む過程での経験から、長らく死蔵され忘れ去られた古いフィルムの所在を知ることとなり、あらためてそれらを世に出すことに関心を持つようになったようである。その包括的な調査と作品復元のためのプロジェクトは、在ウズベキスタン共和国スイス大使館スイス発展協力機構(the Swiss Agency for Development and Cooperation of the Embassy of Switzerland in Uzbekistan)の助成を得て、「教育メディア・コース〈シネマ・レクチャー〉」プロジェクト(Проект «Образовательный медиа-курс КИНОЛЕКТОРИЙ»)として実施され、2018年には作品情報の整理やフィルムの復元と

(6) 中央アジアとの関連でいえば、メッセレルはスターリンの大粛清の際、1937年の夫の逮捕に伴い翌年には自身も逮捕され、やがて子供たちから引き離されてカザフスタンのアクモリンスクの収容所、次いでシムケントにおいて流刑生活を送った[プリセツカヤ 1996: 5, 24–25, 55–60]。

(7) フランス語の原題は本稿執筆時点で確認できなかったが、ロシア語訳は *молодой месяц* (『新月』)。

(8) トルコの映画監督ムフシン・エルトゥグルル(Muhsin Ertuğrul)がソ連で制作した「タミラ (Тамилла)」(ウクライナ映画社、1925年)はデュシェンの同名の作品をもとにしたソ連映画である。

デジタル化などの基本的な作業を終了した。

アッバソフ氏によれば、一連の無声映画のフィルムは、主としてロシア国立映画写真記録文書館（РГАКФД: Российский государственный архив кинофотодокументов）に所蔵されている。その他にもウズベキスタン内外の文書館や民間に保管された古いフィルムについて調査が行われた。上記のロシアの文書館とは建設的な形で合意ができ、復元可能なフィルムについてデジタル化が実現した。結果的に、劇映画 22 本（最初のトーキー作品 1 本を含む）のフィルムが「再発見」された（うち 2 本は再生不可だったそうである）。カリモヴァ氏はこのプロジェクトの学術コンサルタントを務めている。

ウズベキスタンで無声劇映画が制作されたのは 1925 年から 1935 年までである。作品の一覧⁽⁹⁾を表 1 に整理しておく。

表 1 ウズベキスタンの劇映画作品リスト 1925～1937⁽¹⁰⁾

作品原題 (別の作品名)	作品名試訳	製作年	製作会社	種別	監督	脚本	テーマ	備考
*Минарет смерти (Пленница гарема)	死のミナレット (ハーレムの女奴隷)	1925	ブフキノ/ セヴザブキノ	民話の 映画化	В. Висковский	А. Балагин, В. Висковский	プハラへ旅するヒ ヴァ・ハンの娘の 冒険と出会い	中央アジアで最初 の劇映画作品。作 品の一部は復元不可
Мусульманка (Дочь Керима / Дочь корана)	ムスリマ (ケリムの娘/ クルアーンの娘)	1925	プロレト キノ/ ブフキノ	プロバ ガンダ 映画	Д. Бассалыго	Д. Бассалыго	ソヴィエト中央ア ジアのムスリム女 性の目覚め	フィルム現存せず
Пахтаарал (Как ожила Голодная степь / Возрождение Узбекистана)	パフタアラル (飢餓ステップは いかに蘇ったか /ウズベキスタ ンの復活)	1925	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	А. Щербakov (Н. Щербakov?)	А. Щербakov (Н. Щербakov?)	ロシア革命がウズ ベク農民にもたら した恩恵	フィルム現存せず。 従来最初のウズベ ク劇映画とされて きた
*Солнечное счастье (Бахт Куяши / Закон корана / Власть Советов и вода)	幸福の太陽 (クルアーンの定 め/ソヴェイト 政権と水)	1926	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	В. Кривцов	А. Ардатов	ウズベキスタンの 土地・水利改革に おける農民たちの 奮闘	ドキュメンタリー と劇映画のモン タージュから成る
*Вторая жена (Две жены)	二番目の妻 (二人の妻)	1927	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画、 小説の 映画化	М. Доронин	Л. Сайфуллина, В. Собберей	新旧いずれの規範 を選択したかによ って命運の分かれ た二人のウズベ ク人女性	ウズベキスタンの 女性脚本家によっ てシナリオが書か れ、ウズベキスタ ンの女優が出演し た最初の作品
*Шакалы равата	ラヴァートの ジャッカル	1927	ウズベク ゴスキノ	劇映画	К. Гертель	В. Собберей	ウズベキスタンに おける国内戦	国内戦を描いたウ ズベキスタンで最 初の映画
*Чадра (Чачван)	チャドル (チャチヴァン)	1927	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	М. Авербах	М. Инсаров, П. Коротков, В. Булах, М. Авербах	ウズベキスタンに おける 女性解放	

(9) ロシアのサイト КИНО-ТЕАТР.РУ (<https://www.kino-teatr.ru>) ではこれらすべての作品について「ソ連映画」として基本情報を見出すことができるが、比較的最近刊行されたロシア・ソ連映画の概説書 [Rollberg 2009] ではこれらについてまったく言及がない。

(10) 最後の無声映画制作は 1935 年だが、カタログには 1937 年制作の初のトーキー作品が含まれている。

作品原題 (別の作品名)	作品名試訳	製作 年	製作会社	種別	監督	脚本	テーマ	備考
*Крытый фургон	幌馬車	1928	ウズベク ゴスキノ	劇映画	О. Фрелих	Л. Сайфуллина	クルグズスタンにおける国内戦下のあるクルグズ人女性とその恋人の運命	
*Из-под сводов мечети	モスクの丸屋根の下から	1928	ウズベク ゴスキノ	革命を描く歴史映画	К. Гертель	В. Собберей, К. Гертель	1916年反乱におけるウズベク人民の領主たちの抑圧との闘い	フィルム 現存せず
*Прокажённая	毒された者 [女性ハンセン病患者]	1928	ウズベク ゴスキノ	小説の映画化	О. Фрелих	Л. Сайфуллина	あるウズベク人女性の悲劇的運命	
*Араби	アラビー	1930	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	Н. Зубова	Н. Зубова	カラクリ羊の高級種「アラビー」育成アルテリ建設をめざすウズベク農民の奮闘	
Последний бек	最後のベク	1930	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	Ч. Сабинский	М. Рудерман	ウズベク農民のバスマチとの闘い	フィルム 現存せず
Подъём	躍進	1931	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	Н. Ганиев	Н. Кладо, Н. Ганиев	ウズベキスタンの工業化	初めてのウズベキ スタン出身監督に よる作品
Дочи святого	イマームの娘	1931	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	О. Фрелих	М. Рудерман	1930年代のウズベキスタン、邪なイマームに翻弄される女性の悲劇	
*Её право (Перелом)	彼女の権利 (急転)	1931	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	Г. Черняк	Б. Леонидов	ウズベク人女性の労働の権利	
*Американка из Багдада	バグダード村のアメリカ綿	1931	ウズベク フィルム	プロバ ガンダ 映画	Н. Кладо	Н. Кладо	ウズベキスタンにおける綿花コルホーズの形成と富農との攻防	フィルムは 第4部を欠く
*Рамазан	ラマダーン	1932	ウズベク ゴスキノ (ウズベク フィルム)	劇映画	Н. Ганиев	Н. Ганиев	1930年代初頭のウズベキスタンの綿花栽培農民における宗教との闘い	
Перед рассветом	夜明け前	1934 (1933?)	ウズベク ゴスキノ	プロバ ガンダ 映画	С. Ходжаев	С. Ходжаев	1916年反乱	
*Колодец смерти (Убийца)	死の井戸 (殺人者)	1934	ウズベク ゴスキノ	サスペ ンス	Н. Кладо	Н. Ганиев, С. Петров, Д. Жиряков	カラクム砂漠の地質調査をめぐる陰謀	
*Джигит (Егит)	勇者	1935	ウズベク ゴスキノ	革命を描く歴史映画	Н. Ганиев	Э. Хамраев	ウズベキスタンにおける国内戦下の勇士たち	
Клыч (Хочу быть машинистом)	クリイチ (機械技師になりたい)	1934 (1935?)	ウズベク ゴスキノ	劇映画	Ю. Агзамов	А. Шарапов	少年クリイチの夢と冒険	ソ連で最後の 無声映画
*Клятва (Я не предатель)	誓い (私は裏切者ではない)	1937	ウズベク ゴスキノ	劇映画	А. Усольцев- Гарф	Г. Кудрявцев, И. Иванов, П. Сентюрин	1926年土地改革におけるウズベク農民の決意	ウズベキスタン で最初の トーキー作品

Аббасов [2018]、Каримова [2016]、КИНО-ТЕАТР.PY 掲載の情報により筆者作成。作品原題に*を付した作品は当該プロジェクトにより再生・デジタル化されたもの。

4. 中央アジア近現代史のなかの無声映画の魅力——むすびにかえて——

上映会に先立つ12月9日には、同会場で開催された Special Seminar: Frontiers of Gender Studies in Asia においてカリモヴァ氏による報告「ウズベキスタン映画における女性の表象 (The Images of Women in the Cinema of Uzbekistan)」が行われた⁽¹¹⁾。以下、最後にこの報告から得た情報も含めて、筆者にとって興味深く感じられた点に触れておきたい。

すでによく知られているように、ルミエールのシネマトグラフ発明からわずか2年後の1897年にはロシア帝政下のタシュケントでもその興行が行なわれ、1908年にはヒヴァ・ハンに仕えたフダイベルゲン・デヴァノフ (Xudoybergan Devonov / Худайберген Деванов、1879–1937) (中央アジアで最初の写真家でもある) が帝都サンクト・ペテルブルグから持ち帰った機材で自らヒヴァの人々や情景を撮影し始めた (「シネマ・レクチャー」にはデヴァノフの撮った映像も含まれている)。ソヴィエト時代になると、レーニンが社会主義建設推進のために大衆にとってあらゆる芸術の中で映画こそ最も重要だとしたことから、全ソ連的に映画制作が奨励された。そうした背景があったとしても、現在のウズベキスタンの領域においてかなり早い段階から映画産業が始動していたことに新鮮な驚きを覚えた。特に、無声映画制作を経験したのは、カリモヴァ氏の言によれば、中央アジアではウズベキスタンだけだという。その背景には何があったのだろうかと好奇心を掻き立てられる。

この観点からとりわけ興味深いと思われるのは、1924年4月にレニングラードのセヴザプキノ (Севзапкино) との契約により設立され、翌年「死のミナレット」と「ムスリマ」を世に出したブハラ・ロシア映画会社 (Buxoro Rus kino shirkati / Русско-бухарское товарищество «Бухкино」、通称ブフキノ) の存在である。カリモヴァ氏によれば、ブハラ側には資金がなく、ほとんどロシアの会社だとみなしても差し支えないそうだが、その設立はむしろブハラ人民ソヴィエト共和国 (1920–1924) 政府が熱心に働きかけたようで、それを強力に推進したのはブハラ政府の首班 (人民委員会議長) ファイズッラ・ホジャエフ (Fayzulla Xo'jayev / Файзулла Ходжаев、1896–1938) だったという。ロシア革命前のブハラのジャディードたちは戯曲や演劇を民衆教育のための有効な手段と考えたが、ホジャエフらかつてのジャディードを含むブハラ政府の映画への関心はその延長線上にあると考えられないかとカリモヴァ氏に尋ねたところ、その可能性はもちろんあるのだが、むしろ興味深いのは、ブフキノはプロパガンダよりは商業的な目的でこれらの映画制作に乗り出したことだという回答が返ってきた。実際に、制作された作品はソ連外へ輸出され、一定程度の成功を取めたそうである。

短命ではあったがブフキノを視野に入れることで、現在のウズベキスタンの領域における

⁽¹¹⁾ セミナーの概要およびカリモヴァ報告については <https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/gender-equality-promotion-committee/> を参照されたい。

映画制作の歴史は従来考えられていたよりも（つまりウズベクゴスキノの成立よりも）若干早く始まっていたことが確認されたことになり、また映画制作における中央アジア側とソ連中央との相互作用という側面に光が当たることになるのではないだろうか。また、映画史と政治史の結びつきという観点からも多々興味深い点がありそうである。

その他、劇映画であっても当時の景観や人々とその習俗を記録した歴史的資料としての映像の価値という観点から、これらの映画が貴重なものであることは言うまでもない。

加えて、無声映画の制作が社会主義的近代化のための諸政策導入の時期と重なることから、とりわけプロパガンダ映画と位置づけられた作品においては、いわば「ソヴィエト的近代」がよきものとして表象され、テーマに女性解放やパランジ(イスラーム・ヴェール)放棄、土地水利改革、脱宗教化、工業化といった政策が如実に反映されているのがわかる。従って、これらの映画作品におけるソヴィエト的オリエンタリズム、ソ連における「西」と「東」の問題、ジェンダー表象の分析などもおおいに展望の見込める研究領域ではないだろうか。

現在のウズベキスタンでは、これらの無声映画を、歴史の闇から復活した「ウズベキスタン映画」として提示することがおそらく求められるのだろうが(ウズベキスタンにおける歴史記述と同様に、現在のウズベキスタンの領域で生み出されたものである限り、それを「ウズベキスタン映画」と表現することは可能なのだ)、それはソ連映画の一部でもあったことも同時に忘れてはならないと思う。ソ連的なプロパガンダを内包したものであるがゆえに、復活を喜ぶ一方で、イスラーム復興や伝統回帰志向が拡大する現在のウズベキスタン国内で上映を試みれば、必ずしもいつも好意的な反応がかえってくるわけではないようだ。カリモヴァ、アッバソフ両氏はこのあたりの機微をたいへんよく承知しながら、ある意味で淡々とプロジェクトに向き合っているとお見受けした。映画研究の分野で個々の作品分析がなされることに加えて、特に中央アジア研究の立場からは、複雑でデリケートな背景や文脈にも目配りしながら、これらの映画作品とその制作の歴史を読み解くような研究が日本からも生まれることを期待したい。

参考文献

- Каримова, Нигора. 2016. *Игровой кинематограф Узбекистана*. Ташкент: Издательство журнала «San'at».
- [Аббасов, Ельджон.] 2018. *«Немое» кино Узбекистана (1925–1935)*, Ташкент: Издательство «Baktria press».
- Rollberg, Peter. 2009. *Historical Dictionary of Russian and Soviet Cinema* (Historical Dictionaries of Literature and the Arts, No. 30), Lanham, Maryland/Toronto/Plymouth, UK: Scarecrow Press, Inc.

Rouland, Michael, et al. eds. 2013. *Cinema in Central Asia: Rewriting Cultural Histories*, London/New York: I. B. Tauris.

マイヤ・プリセツカヤ 1996 『闘う白鳥——マイヤ・プリセツカヤ自伝——』（山下健二訳）東京：文藝春秋。

（京都大学東南アジア地域研究研究所）